
異世界情報屋になったぜ！

桜 狂歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界情報屋になつたぜ！

【Nコード】

N4710Z

【作者名】

桜 狂歌

【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公がいろんなアニメの世界へ行き異世界情報屋になるお話です。ついでに言うとも何でもありな主人公です。初作品ですが、温かく見守ってください。

オリ主紹介（前書き）

作者「記念的な第1話を読んでもください」

オリ主紹介

名前

藍雷らんらい

咲夜さくや

愛称

咲夜、サツキー

性別

女（勘違いで男と思われる事も多々）

年齢

10歳

性格

普段はのんびりしていて、時々ロードのように見えることも多々ある
多重人格でイノセンスや錬金術を使うと別人になる
意外とキレやすい

好きな物

アイス、肉、女の子（特に可愛い子）、子熊（白い感じの）

嫌いな物

喧嘩を売ってくる奴、悪党、自慢話ばかりな奴、面白くない人
気に入らない人

容姿

見た目はハガレンのウィンリィに近い（髪は黒、腰辺りまでのスト
レート）

髪はいつもポニーテイル、何故かゴーグル着用、目は透き通った青色

服装

黒のミニスカに胸の辺りがすごく開いてる露出度の高い服、黒のロングコート

二つ名

評議員や表社会からは、白黒情報屋

いつも、表社会の情報や裏社会の情報を持っているから
闇ギルドなどの裏社会からは、多重人格の魔王
戦闘で錬金術やイノセンスを使うと別人格になるから

強さ

判定不可能

能力（技や魔法なども・・・）

異常 オールバーフェクト
全知全能

過負荷 大嘘つき（オールフィクション）

スカーデッド
致死武器

ラフレシア
荒廃した廃花

イノセンス 寄生型で目と喉、装備型で刀を所持

発動時の能力はのちに紹介

ノアのメモリー 始まりのノア 時空のメモリー

ティキの快樂のメモリー

ロードの夢のメモリー

錬金術 呼び名「創造の錬金術師」

ある人の許可が出ればなんでも作るから

魔法 風の魔法

星の滅竜魔道師 星を使った滅竜魔法ができます

星を使うので、魔法がキラキラしています

後に追加していきます。

口癖（一人称）

普段は「僕」で怒った時などに「俺」になる
ちなみにキレると完全に男みtainな発言になる

相棒（てか執事？）

名前

アキ・フュース（咲夜に義兄にされている）

年齢

？歳（年齢不詳）

性格

誰に対しても親切で優しい、だが咲夜を傷つけられると、キレて悪魔の力を発揮してしまう

普段はまったくもって温厚な人である（咲夜を傷つけられることが少ないから）

好きな物

主人である咲夜、子熊（咲夜と同じ）

嫌いな物

咲夜を馬鹿にしたり怪我をさせる奴、悪党

容姿

簡単に言って顔立ちがハガレンのマスタング大佐なだけで
あとは黒執事のセバスチャン達と同じ

口癖

稀に了解した時などの返事が「イエス マイ レディ」になる
普段だと「かしこまりました。お嬢様」である

オリ主紹介（後書き）

さっそく長かったっすね。まあ、がんばってやっていきたいと思ひます。

もうすぐ冬休みですし、がんがんやっていきたいです。

追記

原作のキャラ達は使いますが、原作にそつてお話が進むかはまったくもつてわかりません（思いつきがあるからです）

プロローグ（前書き）

新たな情報屋が今ここに生まれる

って、なんかありきたりな気がするんだけど・・・

プロローグ

「ありやりや？ここはあどこ？」

ただいま僕は真っ白な空間で座っていた

「ふむ、死んじやったパターンだね！しかも神様のミスとか！」

「へえ、理解が早くて助かるよ君」

「誰かのお？」

「ミスで君をやってしまった神様ですが、なんでそんな年寄り系？」

あ、気づいたかってか、今神様って言った？

「うん言ったよ」

「おい、地の文に返答出すなよ」

「あ、ごめん」

素直な神様だねいろんな意味で・・・ブフツ
と内心で笑っていた少女

「今のはスルーしてあげようか」

よっしゃ！やっぱ素直だな

「そんなことより、本題に入るよ」

「どうぞどうぞ」

「さっきも言ったとおり俺のミスで君は死んだから別世界へ行つて
ね」

「別世界だとおおおおおお？！」

（何この子、すっげえ過剰反応なんだけど；；）

反応に驚いていた神だったが少しずつ後ろへ退いていた

「それでね、君には別世界行くついでに特例で異世界情報屋になつてもらいます」

「え、何それ？てか、何で僕なの？」

「いやあ、ちょうど良いところに俺のミスで君が来たからさあ」

うわあ、この神せいよ、ちょうど来たからって
絶賛、神に対しての文句を放つ少女であった

「そんで、一番最初の世界は決まってるから」

「え、じゃあ、どこ行くかわからないパターン？！」

「そゆことだね、ついでに言うと特例で情報屋やつてもらってから、
異世界飛び回るための
能力だけ俺からのプレゼントね」

「あ、よっしゃ！」

ん？待てよそういう能力って期間とかあんの？

「それに関しては心配ご無用」

「また、地の文つつこんだし」

「ま、いいよ、で能力とか容姿についてだけど・・・」

「そおねー、まず見た目はハガレンのウィンリィ似で目は青、髪は
黒で腰の辺りまでのストレート」

容姿だけでいろいろ注文する少女

「すごいね、いろんな意味で」

「服装については、露出度の高い服でね、それと黒い服はぜったい十着以上はなきゃね」

「そんなに黒いのいるの!？」

「あたりまえでしょ、僕黒が好きなんだから」

「それと、黒のロングコートは絶対ね」

「わかりましたあー」

まったく、曖昧な返事だなあ

「さて、能力は？」

「えっと、めだかボックスの過負荷マイナスで大嘘つき（オールフィクション）と致死武器と荒廃した廃花ラフレシアね」

「過負荷でそんな付けるのか」

アフノーマルオールパーフェクト
「異常は全知全能ね」

「全知全能？」

「そう、めだかは完成ジ・エンドっていうので本来の持ち主よりも完成された状態で十分に使うものでしょ？」

「うーん、そうだね」

「で、僕の言う全知全能は持ち主の能力を十分に使うのではなく、十全に使うんだよ」

「へー、そりゃあすごいや!」

オリジナルにしちゃすごすぎたかな？

「ほかには？」

「そうだね、Dグレというイノセンスね」

「装備型？寄生型？」

「えっと、目と喉に寄生型のイノセンスで、装備型のイノセンスを刀の形で頂戴な」

「え、寄生型と装備型で、計3つもイノセンスを持つの?!」

「だめなわけ？後、ノアのメモリーでオリジナルの始まりのノアとして時空のメモリーね」

「まだあんの！」

「それとティキの快樂のメモリーとロードの夢のメモリーね^^」

少女の表情にはうつすら青筋が見えた

「な、ななななな、なんかすいませんでしたあああああああ
！！！！」

さすがの神様でも少女の圧力には負けてしまうのである

「ほかにもあるの・・・ですか？」

「んー錬金術かな」

「して、どのような？」

「そさね、創造の錬金術とでも言おうか」

「創造の錬金術？」

「そう、いろんなものを作るの・・・人体錬成以外ならなんでも」

そして少女は少し悲しげな表情で言った

「わ、わかったよ創造の錬金術ね」

「後ね、風の魔法と星の滅竜魔法ね」

「風はわかったが星の方は滅竜魔法なんだね」

「うん、僕ね滅竜魔道師ドラゴンスレイヤーになりたかったんだ」

「でも、なんで星なの？」

「え、あ、いやあ、いいのがなかったもんでえ」

「そうゆうことか（苦笑）」

あー、他の能力どうしよっかな今言っても神様困るか

「あ、そこについてはノープロブレムだよ」

「またしても、地の文つつこむし、ひらがな英語だし」

「そんな言わないで傷つくよ・・・」

「あ、ごめん、そのとこ気づかなかった」

「ま、ノープロブレムなわけだ」

また、ひらがな英語てか、なんで？

「君が別世界へ行っても情報などをこちらへ送るために、テレパシ
ーや通信機をまたしても俺からプレゼントだ！」

「おお、神様太っ腹」

「そうだろうそうだろう、もつと俺を褒めたたえろ！」

あーすごいすごい神様すごい（めちやくちや棒読み）

「ひでえ、言い方が雑すぎるしかも口に出して言わないし（泣）」

「ま、これで困らないね」

「もう、かなえてほしいことは無いね！」

「いや最後に一つね」

「ええ！！」

なんだよまだ文句あんのかよ あゝ？

口には出さないが表情で、また出していたのであった
それを見た神は

（ヒイイイイイ、やつぱしこええよ、何なんだあの嬢ちゃんよ
お、圧力ハンパなさ過ぎだ！）

またしても、圧力で負けておびえている神である

「最後は、僕に執事をくれ！」

「え、執事っすか？」

「そう、執事よ。執事って何かと役にたつでしょ？」

「それもそうだね。で、普通の執事それとも悪魔？神？天使？」

「悪魔でお願いね。顔立ちハガレンのマスターグ大佐みたいなの
で、あとは黒執事のクロード達とかと一緒にね」

「わかったよ。名前は君が付けてあげる？」

「そうね、そうするわ」

さて、名前か、何が良いかな。あーあれでいいか

「ならさ、僕のお兄ちゃんだったアキ・フュースでいいよ」

「何その名前、外人？」

「ハーフだったのよ、生まれたのが外国だったから」

「へえー、そうなんだあ。え、じゃあ君もハーフ？」

「一応そうなるわね」

「じゃあ、君のお兄さんって設定であげようか？」

「それはやめて。でも、義兄という事でならいいわ」

「OK。執事は向こうに行ったら会えるからさ。じゃ、これでいい
ね？」

うーん、うん他にないな

（はあ、よかったあ）

やっと終わって安心してた神様でした

「それじゃ、向こうについたら、手紙と情報と服一式やらなんやら
送っておいたから。それと行く場所はすべて君の行きたい所だから、

さけびながら異世界に飛ばされる咲夜なのでした
さあ、特例の異世界情報屋がいろんな世界でやっていけるのか

「やっていけらあ（怒）！」

次回へ続くのであった

「ちょ、待て、俺の文句はまだ終わって・・・」

プロローグ（後書き）

はあ、こんなんでやっていけるだろうか

ま、行き当たりばったりなお話しだから問題ないか（ありありだろ）

てかさ、イノセンスほしいなあ（作者の願望）

ここってフェアリーテイル？（前書き）

まずは、フェアリーテイルから行ってみようかな

ここってフェアリーテイル？

「おわっとなっとな。あ！」

ズサーーードカン

到着そうそうでバランスを崩し転ぶ咲夜

「あたたた、いってえーなあもう！」

「大丈夫ですかお嬢様！」

到着したそこには執事であるアキ・フースが立っていた

「ん？ああ、アキか」

「お初にお目にかかります、お嬢様」

「自己紹介はしないでいいからね」

「わかっております。私はあなた様に作られた存在ですから」

実際は神が生み出したんだけどなあ

自分がくれと言ったのをすでに忘れていた咲夜だった

「ま、んなこたあどうでもいいよ、というかここどこ？」

「えーつとですねえ。あ、そういえばここにお手紙が・・・」

「かして！」

咲夜ちゃんへ

今頃は到着そうそう転んでいるのであろう（なんで分かるんだよ）

そんな君に教えます。まず最初の世界はフェアリーテイルだよ。

ついでに言っと原作開始の一週間前なんでさくつとフェアリーテイルに入って

ギルド所属してくれない？そんで原作関係の人達と行動して情報集めをしてちょ

まあ、軽い情報はここに付けとくからね第二の人生楽しんでね

PS この髪は君が読み終わる頃に爆発するからね（あのときの暴言のお返しだ！）

「な、なんだとおおお！！」

「どうされましたか！？」

「あ、あ、あ、あつちに飛ばせ！」

「わかりました」

カサカサ ピューーーーー

予想外な事に風が吹いてきて勝手に飛んでいつてしまった

「あ」

「ありや？」

ヒラヒラヒラヒラ

ボツカーーーーーン

そして飛んでいったと思った途端に爆発をしてしまい、少し近かったせいか咲夜は爆風に飛ばされてしまった

「あ、きやあああああああ」

「お、お嬢様！！？」

「アキーーーー助けてえー」

「今すぐにd・・・・あ」

そこでアキは何かに気づいた様子

「お嬢様！その方角はフェアリーテイルのある場所なのでそのまま

飛んでいってください!」

「ええええ、そんなあああああああ」

というわけで、咲夜はフェアリーテイルのほうへ飛んでいったので助けてもらうことができませんでした

〵〵数分後〵〵

絶賛、落下中の咲夜

しかもフェアリーテイルの真上

その頃の咲夜とフェアリーテイルの人達

ひゃあああああああああああ

「ん?なんだこの声?」

「どうしたナツ?」

「いや、どつかから叫び声が出た気が・・・」

「そりゃ、ねえーだろ」

「あん?俺を馬鹿にしてんのか!」

「てめえ、こそ俺のこと馬鹿にしてんだろ!」

「んだとお!」

「今日こそ決着つけんぞ!」

いつものようにナツとグレイの喧嘩が始まった
だがその日は少し違った

「ちょ、そこに居る人達どいてえええええええ」

「え?」

ヒューーーーーー スドーン

ちょうど良い感じに咲夜はナツとグレイの喧嘩している所に落ちて

しまった

そして、ちょうどアキも着いたことであつた

「いててて」

「あ、お嬢様大丈夫でしたか」

「ちよつとお！なんでここに来るからつて助けないわけえ！？」

「すいませんでした。この方が手っ取り早かったので」

「まったくもう！」

「それよりお嬢様？」

「なによ」

「そろそろどいてあげては？」

「えっ？」

フガフガフガアー

ジタバタジタバタ

咲夜に下敷きにされている二人はあばれていた

「あ、やばっ、ごめんねお二人さん、気づかなかつたわ」

「いつてえー、ん？誰だお前？」

「みねえ顔だなあ？」

「あ、初めまして僕、藍雷咲夜といいます」

「さ、さくた？」

「咲夜だろうが！」

「そんぐらい俺にもわかる！」

「嘘付け！」

「なんだとお！」

咲夜の名前からまたしても二人の喧嘩が始まってしまった

（このお二人は仲がよいのでしょうか？）

まったくもってどうでもいいことを考えていたアキでした

「こらっ、やめんか二人とも！」

ゴンッ

「「いだっ!?!」」

「あ、あなたは!?!」

「ん?君はいつたい誰だ?」

「僕は藍雷咲夜といいます。咲夜と呼んで下さい!」

「そうか、私h」

「妖精女王のエルザ・スカーレットさんですよね!」

「あ、ああ、そうだ。私も人気になったものだな」

この人って自意識過剰なの?

「して、君はここに何か用なのか?」

「あ、はいっ。僕このフェアリーテイルに入りたくて来ました!」

「おお、そうだったのか。すまなかったなうちの二人が迷惑をかけたようで」

「いえいえ、ぜんぜん迷惑なんて(逆に僕が迷惑かけた気がする・・)
・)大丈夫ですよ」

「そうか、ではマスターに紹介してやろう」

「あ、お願いします。行こうアキ」

「かしこまりました」

そして、エルザに連れられてマスターの元へ行ったのであった
更に、マスターの元へ行くまで周りの者達が

(なあ、アイツ見ない顔だけど新人?)

（そうじゃねえのか？）

（へえーべっぴんさんだなあ）

（後ろの男は何だ？）

（あの子のボディガードか？）

（ええっ、それだったら近づけないじゃねえか！）

などという会話をひそひそとしていたのであった
そんなこんなでマスターの元に着いた

「マスターこの者が入りたいと言うのですが・・・」

「こやつは？」

「はい、ナツとグレイが外で喧嘩をしている時に空から降ってきて
フェアリーテイルに入りたいと、それと彼女の名前は藍雷咲夜とい
うそうです」

「そうだったか（なんで、空から降ってきたんじゃ？）」

「あのお」

「なんじゃ？」

「ここって入るのに条件とかあるんですか？」

「いや、ここは来る者拒まずじゃ！」

まあ、知ってるけどさ、いちおうね

「そうでしたか、よかったあ」

「よかったですね、お嬢様^^」

「うん、そうだね」

「それとそこにおけるそやつはいったい誰何じゃ？」

「あ、彼は私の執事のアキ・フュースという者です」

「初めまして、アキ・フュースです、一応お嬢様の義兄ということ
ですの」

さて、マカロフ殿の反応はいかに

「ほう！咲夜の義兄だったのか。だが、何故執事なのだ？」

「元は執事とお嬢様の仲だったんですよ。でも、私のお願いで義兄になったんです」

「そうじゃったか、そうだ、おぬし、魔法は何をつかうんじゃ？」

お、来たか魔法の話し

「基本的に魔法は風の魔法と憑依の滅竜魔法です」

「なにっ、おぬし滅竜魔導士なのか！しかも、憑依とは」

「なんだって？！お前滅竜魔導士なのか！」

あ、ナツだしかも、あんな遠くでよく聞こえたな

「あ、うんそうだけど？」

「お前強いのか！」

「たぶん・・・」

「なら、俺と勝負しろっ」

おいおいどこの戦闘狂気なんだ
バトルジャンキー

「そうじゃのう、力がどれくらいあるか確認しておきたいしのお」

「ちょ、マスター！」

「いいじゃないかやってみたまえ」

「エ、エルザさんまで・・・」

「がんばってくださいお嬢様」

「ハア、しゃーないやるか」

そして、広場に出た

「ナツとやら、先攻後攻どっちがいいかえ？」

「新人であるお前に先攻を譲ってやるよ！」

「そうか、じゃあ注意しとくよ」

「ん？注意だと？」

「そう、注意ね。僕が使うのは魔法だけとは限らない」

「な、なんだって！」

「ああ、お嬢様は本気で勝ちに行こうとしてますね」

「そうなのかアキ！」

「ええ、エルザ様もよくご覧下さいね。お嬢様の能力をね」

「はじめえい！」

マカロフの合図で試合が始まったのであった

「んじゃ早速やるか、まあ、最初は普通に魔法でね」

パンツ シュンツシュンツシュンツ

咲夜が手を叩いた瞬間勢いよくいくつかの風の刃がナツに向けて飛んで行った

「おわっ、あつぶねえー」

「ありゃ、よけちゃったか、なら！」

パンツ バチバチ シャキン

咲夜は錬成で槍を作った

「槍を作ったと!？」

「おや、お嬢様はさっそく錬金術を使いましたか、ということとは・・・」

・
」

「ふんっ、槍なんかでどうなるってんだ！」

「第一イノセンス発動！」

シューインッ ピカッ

第一イノセンスである喉の部分が勢いよく光を放った

そして、光が消えた時、咲夜の首には十字に光るイノセンスがあった

「な、なんだそれは？」

「ナツは知らないだろうね、これはこの世界に無いからさ」

「なんでこの世界に無いものをお前は持っているんだよ！」

「そんなの秘密に決まってるだよ（笑）」

「音よメロディよ、この槍に纏い全てを絶つ刃となれ」

シユルルルルル ？ ？ ？ ？

どこからともなく音が聞こえその音はどんどん槍に集まっていって

「さて、ナツこれは受けきれん（笑）」

「やってやらあ！」

シューンシューンシューン ザシュッ

咲夜がすごい速さで槍を振り回しナツの腕に当たりナツの腕は負傷した

「うがっ！」

「ナツッ！」

「おいナツ！」

「「大丈夫か！」」」

周りからはナツを心配するこえがする

「危ないですよ、マスター」

「何故じゃアキよ？」

「今はいつものお嬢様じゃないですね」

「どういうことじゃ」

「お嬢様は多重人格で、今は別のお嬢様が出てます」

「そうなのか！」

「このままでは、ナツさんが危険な目にありますよ」

「うむ、わかった。では、やめえい！」

そして、アキの忠告により試合は終わりになった
だが、もう一人の咲夜は満足いつておらず

「な、マスターまだ終わっちゃいないぜ！」

「だが、お前さんとナツがこれ以上やったら周りにも被害が大きい
し、おぬしはナツを殺してしまうだろう」

「ちっ、ばれてたのかよ」

ザワザワ　　ザワザワザワ

今の発言を聞き周りは騒いだ

「しゃーねえ、戻してやるか、イノセンス発動停止」

シューイン　　ばたっ

そうして、イノセンスの発動が止まったと同時に咲夜は倒れた

「お嬢様！」

「咲夜！」

「新入り！」

「あ、これは寝ているだけのようですね。明日になれば会った時と

同じお嬢様になるでしょう」

「そうか、よかったのお」

こうして、ナツと咲夜の試合は幕をひいた

咲夜は寝てしまった後、アキがあとの事をいろいろやり広場の修復や家を立てたりなど

いろいろやってフェアリーテイルへ入った証のスタンプなども勝手に決めて

押してもらっているのであった

こいつてフェアリーテイル？（後書き）

ふう、着きましたね。最初はフェアリーテイルの世界ですよ
さて、このあとの咲夜がどうなるか好ご期待を！

誤字脱字はご了承ください

一週間たってる！？てか原作開始！（前書き）

咲夜「ちよつと、作者どうなってるのよ！修行とかは！」

作者「めんどくさいから省いた。でも、大丈夫、ちゃんと使えるから」

咲夜「それ、信用できないんだけど・・・」

作者「・・・さあLet GO!だよ」

咲夜「ちょ！作s・・・」

一週間たつてる！？てか原作開始！

チュンチュンチュン シャッ

小鳥さえずる中カーテンを開ける音がした

「ふぁー、アキおはよー」

「おはようございます。お嬢様、今日はもう原作開始日ですよ」

「ええええええ、嘘でしょ！！？」

「いいえ、嘘ではございません」

「やつぱー、修行してないや。でも、イメージトレーニングしてるからいいか！」

「さあ、お嬢様はやく朝食を食べてフェアリーテイルに行きましょー」
「う」

「わかったわ！」

ガシャン ドタバタガタンッ ゴンッ いだっ！！

アキに着替えをまかせず自分で慌てながら着替え、机にぶつかりの棚にあたりーのしながら

急いでフェアリーテイルに行ったとさ

走って数分後・・・

あ、あそこにエルザがいる！

「エルザーーーーー！！！」

「おお！咲夜じゃないか！」

「一週間ぶりーって、その持つてるのは何？」

「ああ、これか討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと装飾を施してくれたんだ」

「へえ、すごい大きい角だね！」

「そうだろう、私も今回は大変だったよ」

「私もS級試験通ったらエルザみたいな大きいの倒したいなあ」

「咲夜みたいな者だったら、S級は合格できると思うぞ?」

「ほんとっ！じゃあ、がんばろうっ」と

エルザに褒められた？咲夜はここでS級になることを決意したてか、アキ空気になってないっすか？

そんなこんなで、話をしているうちにフェアリーテイルについたのであった

サイドアウト

フェアリーテイル、ルーシィサイド

私ルーシィ、はいったばかりの新人です

こうみえて星霊魔導士なのよ

今日は家賃がやばいから仕事探さなきゃ

すぐ近くでは、サラマンダー火竜と呼ばれているナツとパンツ一丁のグレイがい

つものようにケンカをしています

そんな時、

「大変だあ——！！」

急に口キが戻ってきて慌てていた

「エルザが咲夜とアキと一緒に帰ってきた！」

[illegible]

「「「「「な、なんだってえー！ー！！？」」「」「」「」
「うげっ！！？」」

「さ、咲夜がきた、だと?!」

あれ、急にナツの態度が・・・って震えだしてる!?

エルザさんは想像がつくけど、そんなに咲夜さんは怖いのか？
それにしても、ギルドが騒然としてきたわね

って、あれ？

「エルザさんと咲夜さんって前にナツが言っていた？」

「今のフェアリーテイルでは最強女魔導士と最強最悪の女魔導士と
言ってもいいと思うわ」

前にナツとグレイが言っていたけど。周りがこんなに怖がるってこ
とは、よっぱど怖い人達なのかな？

すると、

ズシズシズシズシズシ

なんか、人とは思えない足音が聞こえるんだけど

「エルザだ・・・」

「エルザの足音だ・・・」

「やっぱり帰ってきたんだ・・・」

「このリアクション、やっぱりやっぱりエルザさんってすごい魔導
士なんだ！」

すると私の想像で巨人のイメージが出てきてしまった

「怖っ!?!ってあれ？」

私はふと思った。皆二人のことを怖がっているけど、私には咲夜さ

んの方は怖いと思えないくらいの年下だった

サイドアウト

はあよかったあ。ちょうどエルザが帰ってきた所で、これで逃してたら気まずい空気の中へ行くからね

それにしても、やっぱり皆エルザが怖いんだね（自分も怖がられているとわかっていない咲夜）

「今戻った。マスターは居られるか？」

「綺麗だなあ！」

「おかえり。マスターは定例会よ」

「そうか」

周りを見るとナツと 그레이 が肩を組んでいた

なんで、あんな仲良しアピールすんのかわかんないわ？

しかも仲良しアピールなのが分からないエルザもよく分かんないw

あ、ルーシィとミラさんだ

ルーシィとは初対面だね、ミラさんは見たときあるだけ

それにしてもミラさん、情報だと昔は魔人と恐れられていたらしいけど、2年前の事件で妹のリサーナちゃんを亡くして以来、性格服装ともに一変してしまっただけで正直びっくりだよ
凶暴な性格から天然系看板娘ってのもびっくりだけど
すると、

「エルザさん・・・その馬鹿でかい角は何すか？」

あ、僕と同じ質問してるよw

「討伐した魔物の角だ。地元の者が土産にと装飾を施してくれてな
…迷惑か？」

「『『『『『いえ、滅相もございません！』『』『』『』」

「あ、でもエルザそこに置いてちゃだめだよ」

「何故だ？」

「そこにあると通行の邪魔になるし、外に置いておこうね^^」

「ふむ、それもそうだな。すまなかったな咲夜」

（（（（（なんで、そんな注意できんの咲夜／さん／ちゃん！！？）
）））））

ここの注意発言で、皆の心は一つになった

「お前達！」

エルザの一言で皆がドキーン！としてしまった

「旅の途中で噂を聞いた。フェアリーテイルが、また問題ばかりを
起こしているとな！マスターが許しても、私は許さんぞ！」

ここでいつものエルザの説教が始まった・・・と思いきや

「エルザ、たまには説教やめてあげなよお」

「む、だがしかしたな咲夜」

「毎回帰ってくるたびに説教なんてしてたら、皆ストレスで倒れち
やうよお？」

「はっ、それもそうだな。なんで気づかなかったんだ。私の失態だ
！殴ってくれ！」

どうして、エルザはそんな思考へ繋がるんだろう？

（（（（（またしても、咲夜／さん／ちゃんそんな注意がよくできるね！！？）））））

またまた、咲夜の注意発言で皆の心が一つに・・・

「さて、ナツとグレイはいるか？」

「あい」

ハッピーが指が指を指した方向には、ナツとグレイが肩を組んでいた

ああ、そっか逃れたと思ったのに結局声かけられたからあんな風に

（笑）

「や・・・やあエルザ、おれ達・・・今日も仲良く・・・やってる・・・ぜい」

「あゝい」

「ナツがハッピーみたいになった！？」

無理に仲良しアピールしなくてもねえ？

てか、なんでナツハッピーみたいな返事なのさ

それにルーシー、つつこみのキレがいいね！

「そうか。時にはケンカをする事もあるだろうが、私はそうやって、仲良くしている所を見るのが好きだぞ」

「いや、親友なんかじゃ・・・（小声で言ってる）」

「あゝい」

「こんなナツ初めて見るわ！？」

ルーシーが妙だと思うのも多分しょうがない事だ

「ナツは昔、エルザにケンカをいどんで、ボコボコにされちゃったのよ」

「あのナツが!？」

うん、情報によると瞬殺だったようね

「グレイは裸で歩いている所を見つけて、ボコボコに」

「ロキはエルザを口説こうとして、ボッコボコ。自業自得だね」

「やつぱそーゆー人・・・」

その光景、想像できるね

「ちなみに、咲夜が怖がられるのはね」

え、僕って怖がられてんの？

「ルーシーちゃんが来る一週間前にナツが咲夜と試合をして、咲夜の多重人格の中の一人が出てきて、魔法やらイノセンス?とかいうのを使ってナツが腕を怪我してしまって、そこでやめになったの」
「ええ!あのナツが腕を怪我しちゃったの!？」

え、マジであの人出てきちゃったの?だから、試合は嫌だったんだよ。

しかもあのナツに怪我させてんのかよーったく、後で注意しないと
「それとね。そのときの別人咲夜がマスターにねあることを言われたの、しかもその咲夜の返答も驚きだったわ」

『このまま続けたらおぬしはナツを殺してしまうだろ?』

『ちっ、ばれてたか』

えええ、あの人僕の体使つてあんなことまで言つてたの!?

はあ、こりゃーやばいな

もう一人の自分について唸り悩む咲夜であつた

「うつそお!?!あの子も私と同じ新人さんなのにそんなに怖いなんて!」

そんなことがあつたなんて・・・完全に嫌われたかも・・・そんなことをしている間にエルザが、原作に向けての話をし始めた

「ナツ、グレイ、それから咲夜。頼みたいことがある」

「「えっ!?!」」

「え、僕もなの?」

「仕事先でやかいな話を耳にした。本来ならマスターの判断を仰ぐところだが、早期解決が望ましいと私は判断した。三人の力を貸してほしい。付いて来てくれるな?」

「「・・・」」

ナツとグレイは顔を見合わせた

「まあ、僕は問題ないよ。ね、アキ?」

「ああ、そうですね。それにしても、やっと登場ですか・・・」

「ああ、ごめんね。いろいろやってて気づかなかつたわ」

「よろしいですよ。多分後半になるにつれて消えていく存在ですから(遠い目をしている)」

「ああああ、大丈夫だからね?だから、元気出してアキ!」

ああ、アキの元気がなくなっていく。どうしよあ！
アキの様子に困り果てる咲夜であった

「どういう事だ？」

「あのエルザが自分から誘うなんて・・・」

「何事なんだ？」

周りがざわついた

「出発は明日だ。準備をしておけよ」

何故かナツとグレイは睨み合っていた
そんな時にミラさんは、

「エルザとナツとグレイと咲夜、今まで想像した事無かったけど・・・

・・・」

「えっ？」

「これって・・・フェアリーテイル、最強の（最悪の）チームかも・・・」

ミラさんがそう呟いたのを聞いた

「よし、こうなったら、早速準備しなきゃね！」

「そうでございますね。お嬢様急ぎましょう！」

そういうわけで僕とアキは即効で駆け出し準備の為にギルドを後にした

やっぱ女子は荷物が多くなるものでしょ？

一週間たつてる！？てか原作開始！（後書き）

作者「なあ、咲夜ちゃんよぉ」

咲夜「作者僕の名前を気安く呼ぶな」

作者「ええ！ちよつとひどいよ。てか、この話完全に原作そつてるよねえ」

咲夜「それは、作者が参考にするものがいけないだってば」

作者「マジで！？そうか・・・しゃーない、別のもん参考にすつか」

咲夜「というわけで、始まったばかりですが、こんな作者をよろしくね」

作者「おれっちからもよろしくね」

最強チーム集合（前書き）

作者「ふむ。さっそく大変な気がしてきたね！」

咲夜「なーにーが、「大変な気がしてきたね！」なんだよ！」

作者「だってさ、チーム集合の時点でいろいろ危険じゃん？」

咲夜「なんか、いろいろ分らないけど。始めちゃおう」

作者「え、ちよっ咲夜さん?!」

咲夜「どうぞ、ご覧ください^^」

作者「ちよ、ほんと、まっｵ・・・」

最強チーム集合

ルーシーサイド

ただいま、マグノリア駅に居ます

そして、目の前でナツと 그레이 がいつもの様にケンカをしています
ミラさんに二人のケンカを止めてあげてと言われて来ていますが、
二人のケンカを止めるなんて私にはとうていできません

「なんで、テメーなんかと一緒になんだよ」

「俺が知るかよ。エルザの助けなんて俺だけで十分なんだよ」

「じゃあお前だけで行けよ！俺は行きたくねえ！！」

「じゃあ来んなよ！後でエルザに殴られる！！」

どんどんケンカがヒートアップしてなか止めるなんて、できるわけ
ない・・・ごめんなさいミラさん

「すまない・・・待たせたか？」

やっとエルザさんが来た。そう思い振り返ると

「荷物多っ！？」

思わずつつこみを入れてしまった

ナツと 그레이 は、エルザが来たたんすぐさま肩を組んで仲良しア
ピールする

また、ナツはハッピー化していた

サイドアウト

マグノリア駅構内

やっばい、やばすぎるわ。なんでこんな日にかぎって寝坊なのよ！

ただいまの、僕はマグノリア駅構内を走っている

せっかく、原作の開始で皆集まってる時なのに、寝坊だなんて！アキは情報収集で先に行かせてるし

全速力で家から走ってきていた。そして、前方を見ると大きな荷物があった

もうすぐで当たるところで僕はブレーキをかけた……だが、

「あ、やばい！止まらない！？」

キーーーーズルツ ドカンツ

結局止まれなくてエルザの荷物に突っ込んでしまった
すると、エルザ達の声が聞こえた

「な、なんだ今のは？」

「ちょ、エルザさん！咲夜が荷物にはまってますよ！？」

「なんだと！早く助けるんだ！」

さっきの突っ込みのおかげでエルザ達に気づいてもらえて、助かった
そして、僕達は話始めた

「ふう、ん？君は確かフェアリーテイルに居たな」

「新人のルーシィです。ミラさんに同行するように言われて来ました。よろしくお願いします」

「私はエルザだ」

「僕は咲夜だよ。すきに呼んでいいからね」

僕も一応自己紹介をした

「ん？咲夜、今日はアキは来ないのか？」

「ああ、アキね。彼には先に行つて情報収集してもらつてる」

「ほう。仕事がはやいな」

「一応、僕は情報屋が本職なんで・・・（小声で言う）」

「え？アキつて誰なんですか？」

「あ！そつか、ルーシイはまだアキに会つた事無いもんね」

「で、誰なの？」

「アキは僕の執事なんだよぉ」

「ええっ！？咲夜つてお嬢様なの！？」

なんで、あんなに反応するんだ？ルーシイだつて確かお嬢様なのに・
・

「それにしても、君がルーシイか？（チラッ）」「あゝいゝさ」
傭兵ゴリラを小指一本で倒したというのは君の事か。「はあっ！？」

「違うよエルザ。情報によるとオカマっぽいゴリラを・・・ブ
フッ・・・お得意の星霊で・・・倒したんだつてさ」

「（補正ありがとう咲夜。でも、なぜそこで笑う！しかも倒したの
ナツだし！）」

「あと、貴族の屋敷に潜入捜査した時に、セクハラされて屋敷を全
壊させたつていうし「え、っ！？」」

「それ程とは、力になってくれるならありがたい。よろしく頼む（
チラッ）」「あゝいゝさ」

「コ、コチラコソ（色々と誤解だしね！？）」

ありや、震えてるね。原作知識で知ってるけど。誰にも教えてもらえなかったから、知らないって言ったのだけど苛めすぎた？
ルーシィとの挨拶はこれくらいにして

「エルザ！付き合ってもいいが条件がある！」

「なんだ？言ってみろ」

「帰ってきたら、俺と勝負しろ！！」

「「ええっ！？」」

ルーシィとハッピーが驚いた

「おい早まるな、死ぬ気か！？」

「前にやりあった時とは違う！今の俺なら・・・お前に勝てる！それとお前もだ、咲夜！絶対に勝ってやる！」

えゝ僕もなの？またあの人出ちゃうよ

「ふっ・・・確かにお前は成長した。私はいささか自信がないが・・・良いだろう、受けてたっ！だろ、咲夜？」

「はあゝ、僕本人はいいけどさ。またあの人が出てきちゃうのが不安だな。」

「まあ、大丈夫だろう。ナツは頑丈だからな」

「そだね。グレイもついでにやっとか？」

「いや、やめとく。エルザに勝てる気しないし咲夜とやったら死にそう・・・」

さすがにあれを見たから遠慮したみたいだ

「うおゝ！！燃えてきたゝ！！」

天井に向けて火を吹くナツ

列車内

「うつぷ・・・ハアハア」

「ったく、さつきまでの威勢はどこいった」

「毎度の事だけどつらそうね」

今、僕達は列車に乗っている。ナツは乗った途端に乗り物酔いでダ
ウンしてる。今にも吐きそうな勢い

「まったく。私の隣に來い」

「あゝい・・・」

「（どかなきやいけないのかな？）」

僕はナツと場所を交代した

「楽しんでいろよ」

「あゝい・・・」

ドゴツ！？

「グハツ！？」

「「「！！！！」」」」

エルザはナツの腹を殴って、気絶させた

「これで、楽になるだろう」

グレイは見えないフリをした
ルーシイはビツクリしていた
エルザすげえ！、と関心している咲夜

「エルザそろそろ教えてよ。僕達なにすればいいのさ？」

アイゼンヴァルト
鉄の森の事で簡単な説明をしたエルザ

ララバイのことも話していた。ララバイと言う詳細不明の魔法で何かを企んでいるとのことだ

それを阻止するために、今回のメンツが集まった

当然だが、エルザでも闇ギルド一つは厳しい
要約するとこんなとこだ

あ、でも僕はがんばればできるかな？

話が区切られて、駅で昼御飯を買いに出た

ご飯を食べながらの会話中

「そういえば、ナツ以外の魔法は見たことがないわ」

「エルザの魔法は綺麗だよ。血がいつぱい出るんだ、相手の」

「それって綺麗なの？」

僕も同感だよルーシイ。ハッピーそれは綺麗だとは言わないと思うよ

「咲夜の魔法はすごいんだよ！僕らの知らない魔法を使うんだ！」

「ハッピー達の知らない魔法って、どんなのよ……」

ルーシイ、僕が危険な魔法を使うとでも思っているのか？
でもまあ、あれだけは教えとくか

「えーつとですね。前回の試合の時に使った魔法は一つだけなんだけどね（汗）」

「ええっ！？咲夜って魔法以外も使えるって事！？」

「ハッピーの言うことが正しいね。僕は魔法以外のものが使えるよ」

「ええええええええ！！！」

僕の爆弾発言に皆が驚いた。てか、近所迷惑だよ？

すると、エルザがショートケーキを食べながら、グレイの魔法のこ
とを言った。

てか、ナツをテーブル代わりにしちゃだめだよ

「私はグレイの魔法の方が綺麗だと思うぞ？」

「そうだね。見たこと無いけど」

「そうか？てか、咲夜見たこと無いのに同感するなよ」

文句を言いながらも 그레이が手を合わせると、氷で作られたフェアリーテイルのマークが出来上がっていた

「わあ！！」

「氷の魔法さ」

「ああ、それであんた達仲が悪いのね」

「そうなのか？」

「どうでもいいだろ」

オニバス駅

僕はエルザ達が鉄の森の奴らはまだここに居るのかという話を聞いている時に、ハッピーが何かに気づいた

「あれ？ナツは？」

「「「えっ！？」」」

気づいた頃にはもう列車は、遠くなっていた
グレイとルーシィは啞然としていた

「話に夢中で忘れていた。何と言う事だ、あいつは乗り物に弱いというのに、私の過失だ。とりあえず私を殴ってくれないか！」

エルザって違う意味でまじめだね。それにしてもどうしようか？
そんな風に悩んでいたら遠くにアキが見えた。そうだアキに頼んで
おこう！

そんなことをしているとエルザが緊急レバーを引いて、列車を止めてしまった

「仲間のためだ。解ってほしい」

「無茶言わないで下さい」

「私達の荷物をホテルまで頼む！」

「いやっ、なんで私が！？」

見知らぬ人に荷物預けたらだめだよエルザ・・・

「フェアリーテイルの人達って、やっぱりこうゆう感じなのね・・・」

否定できかねません・・・

「俺はまともだぞ」

グレイ・・・半裸で言っても説得力ないよ。「だから服は!？」ほらね

「よし、魔道四輪で追いかけるぞ！」

「あゝ、エルザ大丈夫だと思うよゝ」

「何故だ咲夜？」

「さっきアキ見つけたから、助けに行くよう頼んだ」

「だが、電車に追いつく事なんてできるはずが無い！」

「それができるんだなあ。だってアキは普通じゃないもの（聞こえるか聞こえないかの声で言う）」

「できるのか!?!そうか。だが、心配だから行くだけ行こう！」

こうして、僕達は結局行くことにした

サイドアウト

列車内アキサイド

ふう、どうも皆様。執事のアキでございます

たった今列車に追いつき乗り込んだ所にございます

お嬢様にナツさんをお助けするよう命じられましたが、ナツさんは・・・あ、居ました

そこで、ナツを見つけたアキだったがナツは戦闘中のようだった

「ナツさん、お迎えに来ましたよ！」

「ア、アキ・・・うつぶ・・・」

「誰だお前は？」

「あなたこそ誰なんですか？私はナツさんを迎えに来ただけですの
で」

「俺は鉄の森の一人だ！」

はて？鉄の森とは何でしたかね？聞いたときがあると思いますが・
・（アキも意外と忘れっぽいのであった）

「まあ、どうでもいいですね。ナツさん皆さんが心配しているので
行きますよ」

「あゝいゝ・・・」

そして、私はナツさんを持って窓から飛び降りようとしたら、

「ちょっと待て！八工野郎、俺達鉄の森に手を出したこと後悔しや
がれ！この先の駅で俺達は待っているからな！」

「あっそうですか」

そう吐き捨てて、窓から飛び降りた。すると後ろの方からお嬢様達
の乗った魔道四輪がやってきた。

それに気づいた私は、屋根にいた 그레이さんとぶつかりそうになっ
たのでナツさんを放して、屋根に着地した

サイドアウト

数分後、僕達は列車に追いついた

すると、窓からナツを持ったアキが出てきた

しかしアキは 그레이にぶつかると思ったようで、ナツを放して自分

は助かっていた
そしてナツはグレイとぶつかった

ゴンッ！！！！

「「うぎゃあああああああ！！！！」」

あ、ナツとグレイがぶつかって落ちて・・・え？

「ちよっ、ストップ！エルザストップだよ！」

そうして落ちた二人の元へ集まった

「ナツさん無事ですか？」

「・・・あゝいゝ」

あ、無事？のようだ

「よくも、置いていったな！」

「ごめんね。ナツの存在忘れてたからさ」

あんな風にぶつかったのによく無傷だね

「無事でなによりだ」

エルザはナツを自分に引き寄せた

「いだっ！？」

鎧をしているから当然なぐらい、ガツンと音がした。エルザはいい

人なんだけどね（苦笑）

「まったく。無事ではありませんでしたよ」

「え？アキ列車内で何かあったの？」

「確か、鉄の森とかいう人でしたよ」

「ばか者……！！」

「ゴフツ……！！？」

そういいながらエルザはナツを殴っていた
うわぁ、いつ見てもすごいね！

「鉄の森は私達の追っている奴らだぞ。何故みすみす逃した……！！」

「そんな、話しらねえよ……！！」

「さっき話しただろう！人の話はちゃんと聞けっ……！！」

ブフツ……見てて笑えるねこの二人（笑）

「てか、それには無理があるよエルザ。気絶してたんだから（笑）」

僕は笑いながらつつこんだ

「そうだったな……すまんナツ」

「って、おい！俺殴られ損じゃねーか！」

どんまいナツb（^^）

「そういえば。アキ、ナツその人特徴とかなかった？」

「特徴だあ？」

「そうですね。特徴はありませんでしたが、妙な三つ目のドクロ
のような笛を持っていましたよ？」

「三つ目のドクロ？」

思い出したフリするか

「あつ！そうか！」

「どうしたんだ咲夜！？」

「聞いたときあるから思い出してたけど、わかったんだよ！あれは死の魔法、呪歌の道具だよ！」

「なにっ！？」

「その話、知ってる！」

「それはどうゆう物なんだ咲夜？」

「禁忌魔法の一つに、呪殺というのがあるのだけど、ララバイはもつと恐ろしくて笛の音を聴くだけで死ぬと言われているわ」

「「「「なっ！！？」」「」」」

「ついた名が、集団呪殺魔法ララバイ！」

ものすごく危険だと言いついてる言い方をする咲夜

「集団・・・」

「呪殺魔法・・・」

「そんなもんが町の中で吹いちまったら・・・」

「確実に死にますね・・・」

「冗談ではない！鉄の森の奴らそんな物持ち出したら、何するかわからん！直ぐに乘れ、追いかけるぞ！」

僕にはどうなるかわかるけどね

サイドアウト

最強チーム集合（後書き）

作者「ふう、危険な展開になってきたね！」

咲夜「ねえ、作者。このあと僕はどうなるの？」

作者「え、今教えたら意味無いじゃん」

咲夜「それも、そうだね。んじゃ皆様。つまらないと思いますが、コメントお願いいたします」

作者「いろんな意味でお願いします！」

妖精は魔法壁の中（前書き）

作者「咲夜ちゃんオレッチすごい！」

咲夜「何が？」

作者「飽きつぱいオレッチが続いてる！」

咲夜「そうですかー（感情0）」

作者「えっ、ちょっ、ひどくね!？」

咲夜「まあ、この調子でがんばる（と思う・・・）作者ですので
作者「温かく見守ってくださいえ！」

妖精は魔法壁の中

クローバーの町 定例会会場 マカロフサイド

「マカロフちゃん。アンタんとこの魔導士ちゃんは、元気があつていいわあ」

フェアリーテイルのマスター・マカロフに話しかけているのは青い^{ブル}ベガサス天馬のマスター・ボブだ。マスター・ボブの服に何故羽がはえているのかは本人しか知らない事であろう。そして名前からして“男”である

「聞いたわよ。どっかの権力者を、コテンパンにしちゃったとか？」

「おお！新入りのルーシイじゃな？あいつはええぞお、モチモチボヨヨ〜ンじゃ！」

「きゃ〜、エッチ〜」

マカロフのセクハラ発言に恥ずかしがるボブ

「笑ってる場合かあ〜、マカロフよお」

「ん？」

声の主は正規ギルドの一つ、四^{クラ}つ首^{トロ}の番犬^{ケルベロス}のマスター・ゴールドマインである

「元気があるのはいいが、テメエんとはやりすぎなんだよ。評議員の中には、いつかフェアリーテイルが町一つ潰すんじゃないかって、心配している奴もいるらしいぞ」

ゴールドマインが警告する

「ニヨホホ、潰されてみたいのう。ルーシイのボデーで」

「もうだめよ、自分の所の魔導士ちゃんに手を出しちゃ」

ひどいセクハラ発言のマカロフは放っておいてゴールドマインは更につっこむ

「あのなあ、今じゃ評議員の連中はまだ新人の咲夜とアキの事も危険視され始めてんだぞ」

「う、う、む……」

思案顔になり黙り込むマカロフ達

と、そこに青い鳥が割り込んできた。魔法の手紙を届ける魔法鳥である

「マスター・マカロフ、マスターマカロフ。ミラジェーン様カラオ
手紙デス」

鳥が手紙を持ってきた

「マスター定例会お疲れ様です」

立体映像の手紙を開けると、ミラジエーンが出てきた

「どうじゃ、これが内の看板娘じゃ。めんこいじゃろっ」

「才才！」

酔いながらも自慢するマカロフと集まるギルドマスター達

「実はマスターがいない間に、とってもステキな事がありました」
「ほお」

この後、ミラが笑顔でとんでもない事を言ってきた

「なんと、エルザが、あの咲夜とナツと 그레이 がチームを組んだんです。これって、フェアリーテイル最強チームかと思うんです。一応、ご報告しておこうと思って、お手紙しました」

「・・・・・・なっ、なっ、なっ！！？」

「それでは」

ミラはニツコリ笑って、映像が途切れた

「あらあら」

「心配事が現実になりそうだなあ、オイ」

バタツと倒れるマカロフ

「（なんて事じゃ、奴らなら本当に町一つ潰したり、重体者を出しかねん。定例会は今日終わるし、明日には帰れるが、それまで何も起こらずにいてくれえっ！頼むう！！）」

マカロフの心の叫びが響いた

サイドアウト

クヌギ駅 崖の上

クヌギ駅で騒ぎがあったようね。どうやらあいつらに列車を乗っ取られたらしい

「馬車や船なら分かるけど、列車を乗っ取るなんて・・・」

「あい、レールの上しか走れないし、あんまりメリット無いよね」

「だが、スピードはある」

「列車を乗っ取るほどだし、何か急いでるみたいだね」

「俺もそう思うな」

僕の意見に同意するグレイ、てか「何故脱ぐ!？」・・・僕が言おうとしたのに言わないでよルーシ

「まあ、軍隊も動いていることですし、捕まるのは時間の問題では？」

「そうだといいいけどねぇ・・・」

そう言って次の駅へ向かった

ナツはいつものようにダウンしていた

僕は揺れのせいで頭を打ち気絶しました

オシバナ駅前

エルザに殴り起こされた。えっ、なんで殴られたかって？

なんか、僕は普通に起こしても起きないらしい

そんなこんなで情報確認してみると、脱線事故と言っているが、実は占拠されたようだ

すると、エルザが駅員の人に訪ねていた

「君、駅内なかの様子は？」

「ん？なんだね君h「ガンツ！」グウオ！？」

埒があかないと判断したのか、駅員に頭突きをかますエルザ
これを素でやってるから怖い・・・
見なかったことにしよう

だから、今聞こえてくる悲鳴みたいなのはただの幻聴にすぎない！

アイゼンヴァルト
「鉄の森は中だ！」

「おう！」

「よっしゃー！」

「てか、これあたしの役目！？」

ナツの事はスルーしました。僕達はオシバナ駅内に向かった
ホームへ向かう途中に、軍の兵が全滅していたが今は無視して前に
進む

「やはり来たな、フェアリーテイルのハエ共」

鉄の森が待ち受けていた

「貴様！貴様がエリゴールだな？」

はあ、もうすぐ戦闘になるのかあ。嫌だなあゝめんどいし（笑）

「ハエがあ！お前らの所為で、俺はエリゴールさんに・・・」

「（ん？この声は、どこかで聞いたような・・・？）」

「エリゴール、貴様等の目的はなんだ？ララバイで何をしようとして
いる！」

情報あるから僕はわかるけどね

「分からねえのか？ 駅には何がある？」

エリゴールは空中に飛んだ

「飛んだ！？」

「風の魔法だ！ でも、咲夜も使えるよ！」

そしてエリゴールは拡声器の上に降りた

「集団無差別呪殺をする気が！」

「違うよエルザ！ これは、集団道連れ自殺だよ。聞けば死んでしま
う呪殺魔法を響かせる場所に集まって、道連れ自殺を図かるうなん
て、何を考えているんだ！」

（（（（（（え？？？）（（（（（（

「なっ、そうだったのか！ エリゴール！ 自殺なんてせず、生きて罪
をつぐなえ！」

「そうですエリゴールさん！ 罪を償えば、明るい未来が待ってるは
ずなんですから！。自暴自棄にならずに、ポジティブに生きるん
ですよ！」

アキとエルザが暴走しながら説得しようとしているが、何言っ
てんのこいつ等？
みたいな顔をしている

後ろの仲間や敵の皆まで、黙っている

「あれ？何でしょうかこの疎外感・・・私達なにか外したようですね」

さーてと、そろそろ疑問を言いますかあゝ

すると、列車の時と同じような影が襲ってきたが、復活したナツが防いだ

「てめえ！？」

「その声・・・やっぱりお前か！」

「ナイス復活！」

「そうだ。思い出しました！列車の中で会った人ですよ」

「アキは今頃かいつ！？」

「おー、なんかいつぱい居るじゃねえーか！」

「敵よ敵、みーんな敵だから！」

「へっ、面白そーじゃねーか！」

ナツが戦闘態勢に入った

「エリゴール？って人さあ」

「ああ？」

「ララバイ放送するのに、部下いちゃ駄目やないの？ええ？どうなんだい？」

エリゴールが焦った顔をした

「どういう意味だ咲夜？」

그레이가疑問に思ったように聞いてきた

「だつてさ。ララバイ聞くと死んじゃうのなら、部下達も聞いてしまえば生き残るのはエリゴールだけになるでしょう？」

「『『『あつ！？』『』『』」

「？？」

ナツだけは気づいていないようだ

「（な、なんだこいつは！？俺の目的がこの町じゃねえ事に気付きやがったのか！？）」

咲夜の推測に、エリゴールは驚いていた。

「（このままではバレる可能性が…、こいつを先に片付けねえと！）」

「それにこの先にはクロバーで、定例会場があるよ…。」

「ちっ・・・お前らやっちまえ！」

エリゴールは逃げていった

「こっちはフェアリーテイル最強チームよ。覚悟しなさい！」

「ナツ、グレイ・・・二人で奴を追うんだ！」

後を、二人ほど追いかけていったが、あの二人なら大丈夫だろうナツとグレイは文句を垂れていたけどエルザに一喝されてハッピー化しながら走っていった

「お嬢様、私も皆様についていき情報を集めて参りましょうか？」

「んゝ、いいや。どうせケンカしかしてなさそうな気がするからw」

「わかりました。では、ここで観戦でもしています」

「よしっ、さくつと行きますかあ」

向こうの奴らは人数で勝てると思っていているようで、ハ工共を捻り潰してやるとか言ってる

「下劣な、これ以上フェアリーテイルを侮辱してみろ！貴様達の明日は保障できんぞ！」

「エルザ、僕からすると保障はもうできてないよ・・・」

エルザが剣を出す

「エルザ僕にも半分頂戴ね。あの人がつずいてるみたいだからさへ」

「分かった。だが間違えても重傷者を出すなよ！」

「あゝ、うん。がんばってみるね！」

剣を持ち、飛び出すと敵側も剣を持って襲ってくる。エルザは斧や双剣に武器を換装で変えながら、吹き飛ばしていく

「くそっ！遠距離攻撃でもくらえ！」

「エルザ！」

僕は前に出て一閃で相手の魔法を断ち切った

「断ち切ったあー！！？」

「第3イノセンス発動！」

そして僕は第3イノセンスの刀「醜鬼」を発動して敵陣に突っ込んで叩きのめしていく

「あれって魔法!？」

「いいえ。あれは魔法ではなくイノセンスという神に与えられた能力の物体を具現化された物です」

「何それ!？」

「この世界の方々は誰も知らないでしょうね」

「ええっ!？」

アキは咲夜の事を言った

そうこうしている内に、エルザは槍、双剣、斧と次々換装していった

「二人ともすごいわ!？」

「でも、エルザと咲夜のすごい所はこれからだよ」

「エルザ? 咲夜?」

鉄の森幹部の、カラツカが疑問に思った

「しかし、まだこんなに居るのか・・・面倒だ、一掃する!」

「エルザ半分だからね」

「分かっている。換装!」

エルザの体が光り輝き、鎧が分解されていく

「おおっ、なんか鎧が剥がれてく!」

ケダモノやん、あんた達よ・・・

「魔法剣士は通常、武器を換装しながら戦う」

「ですがエルザさんは、自分の能力を高める魔法の鎧も換装しながら戦う事ができるんです!」

「それが、エルザの魔法・・・」

「その名は・・・」

「ザ・ナイト騎士!!」

アキとハッピーが交互に説明していき、エルザは魔法の鎧、天輪の鎧に換装した

「舞え、剣達よ!」

エルザの周りに、多くの剣が現れた

「エルザア!?!こいつまさか!?!」

「サークルソード循環の剣!」

回転する多数の剣吹き飛ばされる鉄の森

「すごっ!?!一撃で半分も全滅!?!・・・でもちよつと惚れそう!」

「後はまかせる」

「ああ、やってやらあ(笑)」

エルザは、元の鎧に戻った後、咲夜にバトンタッチした

「この野郎オー!」

「よくもやりやがったなー!」

「さあ、雑魚共さんよお、俺が今綺麗に消し去ってやるからな(笑)」

「人格が変わった!?!まさかこいつ!?!」

またカラツカは気づいた

「さてと・・・」

「セリヤアー！」「
危ないっ！？」

『醜鬼第1解放 醜戯の乱舞！』

その時、咲夜の四方八方へ醜い形をした光の線が舞うように飛んでいった

そして、その醜い光で敵は100m近く吹っ飛んだ

「きもっ！？てか、あの光は何！？」

「あれは先ほど言ったイノセンスの力ですよ」

「えっでも、すごく気持ち悪いものだったよ！？」

砂埃が消えるとそこに立っていたのは、奇妙な醜い形をしているがどこか綺麗に見える刀を持った、いつもとは別人の様な咲夜が立っていた

「えっ！あれは咲夜なの！？」

いつもと違う咲夜を見たルーシィは驚いていた。それもそのはず、今の人格は人を傷つける事を楽しみ笑う、咲夜の中の人格なのだから

「ほらあ、早くかかっておいでよ。じゃないと僕がつまらないよ（笑）」

「く、くそお！」

「何者だ！あいつはいつたい・・・」

今の一撃で、敵の半分だけだったのが4分の3もやられていた

「くそっ、オレ様が相手じゃあーーーー！！！！！！」

ビードは突っ込んで来た

「あははは、可愛いそうだからやり方変えてやるよ。イノセンス発動停止・・・」

「まったく、やりすぎだよ。スカーデッド致死武器！」
「ウガアーーーーー！！！！」

すると、突然ビードの古傷が開き、痛みで叫びだした。そして、周りの残っていた奴らも叫んでいた
鉄の森の一人が、

「間違いねえ・・・こいつらフェアリーテイル最強最悪のコンビ・・・」

よく致死武器受けて喋れるね？

戦闘中にどうでもいい事をのんきに考えていた咲夜

「テイナーニア妖精女王のエルザとたじゅうじんかく多重人格の魔王サタン咲夜だ！」

「すごーい！」

「相手が悪すぎる！」

カラツカは一目散に逃げていった。他の奴らは気絶している

僕はエルザを先に向かわせて、オシバナ駅の修復をしてから行く事にした

やらなきゃ、なんか危険な気がするし・・・

「それにしても、直しても直しても穴があるのは何故？」

「誰かが直した所を、また壊しているのでは？」

そう、今僕は駅を直しているのだが、直しても何故か次にはもう穴が開いている

めんどくさいから、歩きながら直して回っていた
目的地についたら、ナツが盛大に壁を壊す瞬間だった

やっぱりナツが原因だったのか・・・

エルザは、血を流し気絶中の男に追い打ちをかけている。
グレイは、内心穏やかとは言えなそうな顔をしている。
ルーシイは、茫然として暗い顔をしている。

「何この状況、ちょっと居たくないんだけど」

とりあえず、事情を聞き魔法壁のあるところまで行った

「うおおーすげっ。竜巻の中に居るみたいだね」

「そうですね。お嬢様はこういうものが好きですものね^^」

「のんきな話をしていないで、咲夜はこれをどうにかできないのか？」

「僕なりの方法は二つ、地面の下を通るか、オルフィクション大嘘つきで無かった事にするかね」

地面の下つてよこれるから嫌だし、大嘘つきはへたすりゃ、建物全部消えるからなあ

「地面の下を通る？あっ！」

ハッピーが叫んだと思ったら、星霊の鍵をルーシイに渡した
能力による穴掘りで、魔風壁の下から抜け出す作戦を提案してきた。
ナツは、カゲヤマも外に連れ出そうとしている。ナツ優しいよ流石

主人公。

ルーシイの星霊のバルゴによって脱出した。外は魔法壁の風が凄かった

「先を急ごか」

「そうだね。急ごっか」

エルザに同意するように答えた

「無理だな。今からじゃ間に合わない・・・俺達の勝ちだよ」

傷ついた体で、勝利宣言した

敵だけどもんどくさいから大嘘つきで直した。だが、逃げられると困るんで魂を半分憑依させて

僕がカゲヤマの体の主導権を握っている

「ナツはどこいった？」

シリアスになっていたら、ナツがいなくなっていた

ハッピーもないから、ついに行っただろう。なら、ラスボスを主人公が倒して終わりか

今回の事件も終わりに近づいたのか。って、やばい、エリゴールで遊ぼうと思ったのに！？

急いで行かなきゃ！

こうして、エリゴールで遊ぶことを思い出した咲夜は、アキをつれて急いで追いかけたのでした

妖精は魔法壁の中（後書き）

作者「次回ララバイとの戦闘です」

咲夜「ララバイは強いのかな（笑）」

作者「咲夜さんもしかして・・・あの人が!？」

咲夜「作者、ちよつとの間黙つとけよ（笑）」

ズシャッ

作者「ギアアアアアア・・・バタッ」

咲夜「あれ?いつのまに作者が!？」

・・・・・・

咲夜「まあ、作者のぶんも・・・次回もよろしくお願いしますね
^
」

エリゴールは変人？（前書き）

作者「すごい、ララバイ編まで来てもうた（ノ　く。）」「

咲夜「ほんとビックリだね。作者がここまで出来るとは・・・」

作者「なんか信じられないって顔してるね？」

咲夜「はあ、当たり前じゃん。では、ララバイ編です」

作者「どうぞ、ご覧ください！」

エリゴールは変人？

クローバー大峡谷 クローバー町目の前

「もう少しでクローバーの町だ。待っている、ギルドマスターのじいども！死神がばーいたあー！えいっ！」何っ！？アベシッ！！」

エリゴールが咄嗟に後ろを向き、走りながら投げてきた咲夜の石が綺麗に眉間に当たった

「やっと追いついた、エリエール！」

「エリゴールだ！！！」

お約束をしたので、バトルパートと行きますか！

「何故、貴様がここに居る？」

「エリーで遊ぼうと思って（＞＜）だ」

「だから、俺はエリゴールだ！！！」

またしても、お約束

「こいよ。その笛もお前も使えなくしてやる！」

（魔法壁は・・・カゲヤマどもはどうした・・・あと少しでじいじどもの居る場所につくの・・・！！）

考えてるの丸見えだよ。一応ばくはテレパシー持つてるから見え見え

「魔法壁は壊させてもらったよ。いろいろ邪魔だったしね？もしやるならこれくらいやらなきゃ・・・」

僕は手の平に魔王印のマの文字を書いて、前にやったときより強く手を叩く

「これくらいやんなきゃねーーーー！！」

そして、カマイタチのような刃が咲夜の後ろから数えきれないくらい飛んでいった

「ぬぁ！？」

エリゴールは数百m上空まで飛んだ

「そのまま上から逃げないでよ？」

僕は一瞬でエリゴールの目の前まで上がる

「何っ！？」

そして錬金術で作った、切れない鎌が上下についた物を叩きつけた

「ぐおお！」

そのまま一気に落ちて行ったので、僕もそれを追い地面に降り立つ
エリゴールも風で勢いを弱め降り立った

（こいつ、一体なにものなんだ！？）

「お前の仲間は多重人格の魔王って呼んでたけど？」

僕はそう言い放った瞬間、遠かったので黒神ファントムを使いエリゴールの目の前まで行き、致死武器でエリゴールの腹のあたりの古傷を開いた

「がああ!!」

そのまま100m近くほど吹っ飛んだ

「くそつ! ストームスクリンガー 暴風波!!」

「効かないよつ!!」

僕はエリゴールの技に大嘘つきを使った

「何っ!?!」

抹消

あの人をだせばすぐだが、遊びたいので出さない

「くそつ!!」

エリゴールは ストームメール 暴風衣を纏う

ものすごい暴風が流れてくるが何の支障もない

「死ねえ!!」

大量のカマイタチを放つ

「おお、危ないよ！これじゃあ避けきれないよお」

そついいながら、大嘘つきでどんどん消していく

「避けてねえが消してんじゃねえか！！」

つつこまないでエリゴール

僕は殺さない程度に、致死武器を調節して古傷を開いた

「がはっ！？」

エリゴールの暴風衣が解ける

「もう、飽きてきちゃった・・・」

僕は飽きてきたので第2イノセンスを発動した

「なんだこの光は？」

やっぱりこの世界には無いからエリゴールも不思議なんだね

そして、エリゴールの目を右の片目だけで5秒間見つめると突然エリゴールが叫んだ

「な、何故だ！？体がうごかねえ！？」

そう、今やったのは固定。第2イノセンスである両目のうちの右だけで見つめ続けると、固定されてしまう力である

「エリゴール皆来るまで、変な格好で待ってな」

「なっ！？おいつ早くこれを解きやがれ！」

エリゴールの叫びを聞いていると、後ろから誰かに呼ばれた

「「咲夜！！」」

振り向くと先に来ていたはずのナツとハッピーがいた

「あれ？二人とも先に来てたんじゃなかったの？」

「それがよー、なんかの匂いで妨害されてあいつの匂いわかんなくてよお」

「あい、そのせいで僕ら迷っちゃって、今ついたところです！」

「ああ、どんまい。エリゴールは僕が遊んで片付けたよ。そこに変な格好で固まってるけど」

そして、ナツとハッピーはおお！といいながら、固まっているエリゴールを叩いている

「本当にお嬢様はお遊びが好きでございますね」

「あ、アキ。あなたなんでしょう？ナツ達の妨害をしたのわ」

「ええ。それに止めて置かないと、お嬢様の遊ぶ時間が無くなってしまうでしょう？」

「それもそうだけど、一応主人公？なんだからさ。来るだけ来なきや駄目じゃん」

「それは・・・失礼いたしました・・・」

謝るくらいなら、もうちょっと派手にやろうよ。って、考える事違うかw

そんな他愛も無い話をしていると、後ろから魔道四輪がやってきた

「遅かったね。もう終わっちゃったよお」

「そこに固まっているのはエリゴールか？」

変な格好で固まっていたエリゴールを不思議をそうに見つめるエルザ

「僕の能力で固定したの」

「って、なんで固定？」

「誰もが思っていると思うが、僕はめんどくさがりだ！なので、めんどかった！」

「そんなの知らないしっ！？てか、エリゴール悲惨・・・」

見るとさっきまでハッピーと叩いていたナツが、グレイと爆笑していた

動けないから泣き出した

「プフフ、エリー悲惨・・・ブフッ」

と、笑いながら言ったらブチッ！エリーじゃねえ！！という声がテレパシーを使って伝わってきた
キレながらつつこんできた

カゲヤマもエリゴールの姿を見て爆笑していた

「少し可哀相な気がしてきた・・・」

エルザがエリゴールに同情し始めた

「大丈夫だよ。これはリミッター付きで、評議員が触ったら解けるようになっているから」

「そ、そうなのか・・・（咲夜は時々黒く見えるぞ！？）」

「というわけで、評議院に送りつけるか！」

「それはおもしろいですね」

「いい案だな」

これはアキとグレイ

「あい、おもしろそうです！」

ハッピーも賛同

皆ノリいいね

とか考えているとカゲヤマがララバイを持って逃げ出した

「笛はココだぁー！ざまぁ見る！！」

そのまま魔道四輪に乗ってクローバーの方へ走り去っていった

「助けてあげたのに逃げるとか、めっちゃありえんていなんですよ！！」

「いえ、お嬢様は何もしていませんよ」

「それに、ありえんていつて何よ？」

アキとルーシイにつっこまれた・・・というかルーシイなんか久しぶりな気が？

「とりあえず追うぞ」

エルザに言われて僕達は追いかけた

サイドアウト

エリゴールは変人？（後書き）

作者「ララバイに行くはずだったのに・・・」

咲夜「大丈夫よ。もう一つ更新するからね！」

作者「あ、そうだった。では、もう一つ更新しますので！」

咲夜「ぜひ、見てくださいね^^」

決闘ララバイ！（前書き）

作者「今度こそ、ララバイとの決闘だーい！」

咲夜「作者は、そんなにララバイ編が好きかい？」

作者「うん大好き。だってララバイが馬鹿っぽいから」

咲夜「でも、原作どおりなのかね？」

作者「えっ・・・？」

決闘ララバイ！

クローバー町 定例会会場の近く

クローバーに着き、急いでカゲを探すとマスターと向かい合っていた他の皆が行こうとすると青い天馬のマスター・ボブが「^{ブルー}いい所だから黙って見てなさい」と止められたカゲとマスターの会話が聞こえる

「どうした？早くせんか」

「・・・」

どうやらカゲは迷っているようだ

笛を吹くことに

「さあ」

エルザが止めに行こうとするが止められる

「・・・！」

（吹けば・・・吹けばいいだけだ！！）

受信感度でカゲの考えてる事が聞こえる

（それで全てが変わる！！）

「何も変わらんよ」

マスターがカゲの心境を見透かすように言う

「さすがだな・・・」

俺は聞こえないよう小さく呟く

カゲが動揺する

「なにも変わらんよ」

「!？」

「弱い人間は、いつまで経っても弱いまま。しかし、その全てが悪では無い！元々人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある！仲間がいる！強く生きる為に寄り添い合って歩いていく、不器用の者は人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれない。しかし、明日を信じて踏み出せば、自ずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らずともな！」

一応、このシーンについては、原作知識があるから知ってたけど、泣けるねb(；；)

見るとアキの担いでいる変人が涙を流していた
カゲが笛を落とす
そして、

「参りました」

負けを認め頭を下げた

その途端エルザにナツ、グレイ、ルーシィ、ハッピーが一斉に飛び出す

「ぬおおおおー！！お前ら何故ここに！！？」

「さすがです！今の言葉目頭が熱くなりました！！」

エルザがマスターを抱く
だが鎧をしているから

「いだっ！！」

というようになるわけで

ナツがほめながらマスターの頭をぺちぺちたくく
青い天馬のマスターはカゲをなんか可愛いと言っている

「はーい、マスター」

僕はマスターに話しかける

「おお、咲夜か。そして、アキも来ておったか。」

「マスター、お土産ですよ^^」

そして、アキがマスターの前にエリゴールと言う名の変人を置いた

「咲夜、アキ、この変な格好をしているのは一体なんじゃ？」

「エリゴールと言う名の変人ですよ」

「エリゴール？あ、ほんとじゃ・・・しかも泣いておるし」

「さっきのマスターの言葉に感動しちゃったみたいで」

とか話していると突然ララバイから煙が上がる

僕はいったんエリゴールを置いた

「ごめんアキ。これ評議院に送りつけておいて」
「わかりました。では・・・」

とりあえず、アキにまかせておく
そして、振り返った瞬間

『ドイツモコイツモ、根性ノネエ魔導士ダナア!』
「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「なんか出た!?!」

皆ララバイから出てきたものに驚いた

『モウ、我慢出来ン!ワシガ自ラ喰ラツテヤロウ!』

ララバイが、巨大な化け物へと正体を明かした。
つかやっぱ、知っているのと実物を見るとじゃ全然違うな。

『貴様ラノ、魂ヲナア!』
「デカ過ぎー!?!?!」
「そこ突っ込むの!?!」

どうでもいいでしょそこは!

「何だこいつは!?!こ、こんなの知らないぞ!?!」
「あゝら大変」
「こいつは、ゼレフ書の悪魔だ!」

会場にいたギルドマスター達は、非難して行った。

「なんで笛から怪物が!？」

「あの怪物がララバイそのもののなのさ!つまり、生きた魔法!それが、ゼレフの魔法!」

「生きた魔法?」

「ゼレフって、あの昔の!？」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士。何百年も前の負の遺産が、今になって姿を表すなんて!？」

とか言ってる内に、怪物ララバイが近づいてきた。

『サ、テ、ドイツノ魂カラ頂コウカナ?』

「なんだと!?!なあ、魂ってうめえのか?」

「知るか!つか俺に聞くな!」

なんでその辺に食いつくのナツ?

ナツ達は、魂を喰ってやるの一言を聞いて魂って美味しいのかと議論してシリアス壊してるし、三人で戦う気満々みたいだ。

「あれ?咲夜は戦わないの?」

「僕もう疲れたし、めんどくさいし」

「もう戦いたくないだけでしょ」

「そういう事だね。でも、安心してよ。いつでも、出れるようにしてあるからさ。危なかったら、いつでも手助けできるから大丈夫だよ」

そんな会話の中戦いが始まって、エルザの騎士で切り刻み、グレイの氷で削られ、ナツの炎で焼かれてボコボコにされていく
ララバイは自身を鳴らそうとするが、戦闘で体に穴があき音が出な

かった

「所詮、笛だもんね」

「散々引つ張つておいて、ださい・・・」

「落ちがついてよかったんじゃね」

その後ラバイがギルドマスター達に炎で攻撃するも 그레이 に防がれ、ナツが炎を食べて三人同時攻撃でしてラバイは倒れたしかし、何故か解らないがラバイが起き上がり『喰ってやる、喰い尽してやる』と呟いているのだ

「なんだこいつは」

「さっき倒したはずだろ!？」

え、なにこのパターン原作になかったよねえ!？
しょうがない、やるかあ(笑)

「おめえら!こつからは俺がやる。手出しすんじゃねえぞ!！」

「や、やばいつ!？」

「えっ?何がやばいのよ!？」

「今の咲夜はあの人だ!しかもやる気満々になつてる!！」

「嘘でしょ!？」

「出るぞ、多重人格の魔王の本当の力が・・・」

全員がこちらを見ている。これから俺が何をするかを・・・

『小娘オマエが相手力、オマエノヨウナ奴ガコノワシニ勝テルワケナイ!』

「はっ、おめえこそ、俺に勝てると思ってんじゃねえぞ、このクソ笛がよお!!!」

あいつらの前でこれをやりたくはないが、しょうがない
まずは錬成からやるか・・・

パンツ バチバチ シャキンッ

咲夜は最初に錬成で鎌を錬成した
そして、次にやったのは・・・

「イノセンス全発動最大解放!!」

「なっ、お嬢様それは危険すぎます!」

「何故だアキ?」

「イノセンスは寄生型だと、ただでさえイノセンス原石がそのまま
でつらいのに、それを二つも解放して・・・」

「そ、それは!!?」

「さらに装備型で制御されてるとは言え、最大解放するなんて、危
険すぎるにも程があります!」

「なんて事だ!」

まったくアキの野郎よけいなこと言っつなよな

「第1イノセンス 闇のメロディの纏まとい」

すると誰も聞いていられないような不吉な音が流れ出した

「な、なんだこの音は!?!」

「頭が割れる!」

周りの皆やギルドマスター達は耳をふさいでいた

「第2イノセンス 闇のアイコンタクト 第3イノセンス 醜鬼劇の破壊」

そうして、僕はアイコンタクトで片目だったのを左目も開きララバイを5秒間見つめたら、ララバイが黒く染まっていき、醜鬼が劇上で踊る人形のような感じで醜くなっていき破壊の波動を出し始めた

『小娘ガソンナ武器デ倒セルト思ウナヨ!』

「くらえっ!闇の踊り会!!」
ダークダンス パーティー

最初に皆が攻撃していた物よりも数倍でかい闇の刃にメロディを纏わせて攻撃を放ったが、ララバイに避けられ後ろの山を2、3つほど消してしまった

一方地上では・・・

「手を出すなって言ってたけど、大丈夫なの・・・」

「おいアキ!咲夜が大丈夫って言ったんだろ?」

「ええ、そうですが・・・」

「なら、大丈夫だろう」

「俺は加勢するぞ!こんな面白い戦いを一人でやらせるか!」

「待て、咲夜の攻撃に巻き込まれて消し去るぞ!」

マカロフがナツを止めた

今ならリスクがほとんどなしに、あの攻撃ができるな

「絶対大丈夫!絶対勝つ!もうあの人は出さないでやるからさ^^」

そうして、地面に降り立ち。トントントとはね始めたと思ったら突然すごい余波と共に咲夜は消えていて、気づいたらララバイの前

にいた。そう、咲夜は黒神ファントムを使ったのだ

「めんどくさいから、これで終わりね」

そういつて大嘘つきを使ってララバイの存在を無かったことにして、
跡形もなく消し去ったのだ

「はあ、終わったあゝ」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

こうして、ララバイとの戦いは終わった

「見事！」

「すゝてき！」

「ゼレフの悪魔をこうもあっさりと」

「わあ！」

「す、すごい！これが…これが、フェアリーテイルの魔導士か!？」

爆煙の中から姿を見せる咲夜

「さすが最強！超かつこいゝ！」

「あい！」

「どうじゃ！すごいだろう！」

マスター、自分の事みたいに自慢しないでくれ

「まっ、経緯はよく分かんが、フェアリーテイルには、借りが出来ちまったな」

「ふむ…」

「しかし、これは…」

マスター達は口噤んでいた。

「あっ…!？」

「んっ? あっ!？」

エルザと咲夜は後ろに向き、事の最悪さに気付いた。

「ん?」

ナツとグレイは後ろを向いた。

「「「「「「「「「「やり過ぎじゃーーーーーーーーーー!?!」」」」」」」」」」

そう、先ほどの爆発で、定例会会場があつた場所は巨大な穴が空き、その周辺の山の二つ三つが吹き飛んでいた。

「定例会の会場どころか…!？」

「あい、山二つ三つ消えてるよ」

「ありゃま…」

マスターはしばらく呆けた後、白い何かが出た。

「あゝっ、マスター!？」

「「何か出た!？」」

「あっはは、見事にぶっ壊れちまったな!」

笑いながら言うナツ。

啞然としているグレイとルーシィ。

マスターの白い何かを追いかけているエルザ。
笑っているナツに文句を言うギルドマスター達。

「よし、俺が捕まえてやる！」

「……………お前は、捕まる側だあ……………」

「……………」

「え？あつそつか！」

マスター達総突っ込みだねナツ。

てかなんで、そんなポジティブになれるの？

こうして僕達は、他のギルドマスター達に追われながら帰る事にした。

だが、僕だけは他の人達が誰も気づいてくれなかったので、アキと二人で寂しく修復作業をしていた

サイドアウト

決闘ララバイ！（後書き）

な、長くなった・・・さて、次回はなんだっけな？

ま、いいか。次回予告書かなければ原作知らない人は楽しみできると思うしね

新しく登場の魔法（技、能力など・・・）

黒神ファントム：めだかボックスの黒神めだかの使う技。一回やると余波によつて服がボロボロになる

ダークダンス パーティ

闇の踊り会：第1第2第3のイノセンスを全部発動し、最大解放して、合わせて放つ攻撃

第2イノセンスの固定：右目だけで相手の目を5秒間見つめると、相手は固まってしまい動けなくなる

ナツVSエルザそんなもって聖十大魔導！？（前書き）

作者「今回はナツとエルザが戦うね」

咲夜「ねえ、なんで聖十大魔導なの？」

作者「それはですねえ……」

咲夜「早く言つてよ」

作者「本文見てくれれば解るよ！」

咲夜「ひどっ！？教えなさいよ！」

作者「知りたい方はどうぞ、ご覧下さい！」

ナツVSエルザそんでもって聖十大魔導！？

マグノリア フェアリーテイル前

今、ギルドの前ではナツとエルザの戦いが始まろうとしていた
ちなみにエルザは、耐火能力のある鎧、炎帝の鎧になっていた

「はじめえっ！！」

マスターの合図と同時に、両者繰り出した

「だあああああ！！」

「ふっ！」

「うおおっ！？」

しばらくの間、両者の攻防が続き共に一撃入れようとしたその時、
パーーーーーンとドラのような音がして振り向くと評議院の蛙
が来ていた

二人はピタッと動きが止まった

音を出した蛙は前に出て名乗った

「そこまでだ。全員その場を動くな。私は評議院の使者である！」

「評議員！？」

「使者だつて！？」

「何でこんな所に！？」

「すげっ蛙だあ！」

「咲夜は驚くところが違うつっ！」

レビイ達シャドウ・ギアが驚いた

そして、使者の蛙について驚く咲夜につっこむルーシー

「先日の鉄の森事件について、器物損害罪他、十一件の罪の容疑で、エルザ・スカーレットを逮捕する！」

「えっ？」

「な、なんだとー!？」

「そして、サクヤ・ランライは別件で評議院に呼び出しをされているので、至急来るように！」

「ええ、僕もなんかあるの!? めんどくせ・・・」

「早く済ませればいいことですよ。お嬢様」

「いつてきまゝす・・・アキはここにいなよお」

サイドアウト

アキサイド

お嬢様とエルザさんが評議院に行ってから、ギルド内はシーンと静まり返っていた

いいえ、カウンターの方でコップに閉じ込められて騒いでいるトカゲが居た

「出せー、俺をここから出せー!」

この喋っているトカゲこそ、姿を変えられたナツです

「何をしたんですかナツ？」

「アキ、あなた何処行っていたのよ? 二人が評議院に行っちゃったんだよ!？」

「ええ、知っていますよ。見ていましたから」

「アキ、どうにかできないの？」

「無理です。例え評議院でも敵に回すことは危険な事です」

「そんな・・・」

えっ？今まで何処に居たのですか？もう少しで分かりますよ^^
それからしばらくして・・・

「出せー、俺を出せー！」「本当に出しても良いのか？」ドキッ！？」

トカゲナツの様子がおかしくなった

まあ、あれはナツさんではありませんし・・・

「どうしたナツ？急に元気が無くなったな」

黙ってしまったトカゲナツ？に、マスターは魔法をぶつけた
煙が上がると、そこに居たのはマカオさんだった

「マカオ！？」

「「ええっ！？」」

またしても、シャドウ・ギアが驚いた

「何でー！ー！ー！？」

ルーシーがつつこんだ
するとマカオさんは、

「すまねえ、ナツには借りがあってよ。ナツに見せかける為に、自分からトカゲに変身したんだよ」

「じゃあ、本物のナツは！？」

「まさか、エルザを追って・・・」

「ああ、多分・・・」

「洒落になんねえぞ！あいつなら、評議員すら殴りそうだ！」

「全員黙っておれ！」

皆がマスターの方に向いた

「静かに結果を待てばよい！」

皆がシーンとなってしまうた

するとその時、リクエストボードの後ろに置いてあった木像から、物音がした

「な、何だ！？」

皆が注目する中、 그레이가木像を割ると中から手足を縛られたナツが出てきた

「ナツ！？」

「「「「「「ええっ！？」「」「」「」」」」」

これは流石の皆でも驚いた。裁判所に居るはずのナツがここに居るのだから

「ナツッ、せっかく俺がトカゲに化けてまでオマエを行かせたのに
いー！？」

マカオさんのキャラがつかめなくなってきましたね？

「何の話だよ？意味わかんねえ？」

「それはこっちのセリフだよ。テメエがなんでこん中にいんだよ？」
すると、かすかにだが笑い声が漏れた

「くっ・・・くくくっ・・・くははは・・・」
「くっく・・・く・・・」

全員がアキの方を見た

「まさか、アキお前か？」

「・・・ええ、お嬢様の命令で・・・」

「えー！？じゃあ、アキがナツを捕まえたの！？」

「ちよつと待て、俺がいつアキに捕まっただ？」

「くっくはあ？」

「だつてお前、エルザと決闘して「俺はまだエルザと戦つてねーぞ？」えっ！？」

話が噛み合っていない状況になっている様子

「なんかしらねえーけど、エルザと戦う前にアキが来て、何かと思えば突然アッパーしてきて、めちゃくちはえーから防げなくて、そのまま気絶して今起きたんだけど」

「くっくくええええっ！？」

さっきまで気絶してた奴が、さっきエルザと戦つてたナツはと皆が疑問に思った。

だが、その答えはアキが答えた。

「先ほど、エルザさんと戦っていたのは、ナツのクローンですよ」
「くっくく・・・ええええええ！！？」

「行くぞおおー！」

「やれやれ……」

エルザは、ナツに強烈なボディブローをかました。バタツと倒れるナツに対して、周りが爆笑した。

サイドアウト

評議院内 咲夜サイド

今僕は、何故か評議院に呼び出されて来ているところです
それにしても、何でだ？僕なんもしてないよ？
評議会に着くとウルティアと出会った

「あ、ウルティアだあゝ」

「あら、あなたは白黒情報屋じゃないの」

「お初だね」

少しうれしかった。闇ギルドの奴らは僕の事を多重人格の魔王と言
うけど、ウルティアは白黒情報屋と呼んでくれた

「それにしても、僕は何でここに呼ばれたんだい？」

「それは行ってみてからのお楽しみつてものよ」

ウルティアも一応、評議員だから知っているかと思いい聞いてみたが、
楽しみだからと言って教えてくれはしなかった

別れる時に、これからよろしくねとか言われた。返し方が思いつかなかった

奥へ進んで行くと、呼び出された扉の前に立つた

ここまで、空気になりながらも連れてきてくれた使者に、礼を言うてから一人で部屋に入った。

序に、書類はすでに渡してある。

「こんにちわ！皆さん！！あつ、オーグさんこんにちわ」

何故か分からないが、よく会うオーグさんとはフレンドリーになりつつある

軽いあいさつをした後、本題に入った

「さて、サクヤ・ランライ！魔法評議員二ノ席オーグの名を持って、せいてんだいまどうそなたに聖十大魔導の称号を与える」

「え？今なんと？」

「聖十大魔導の称号を与える・・・」

「・・・ぬうあにいいいいいい！！？」

「なっ！？そんなに驚く事か？」

「いえ、雰囲気的に驚いてみました・・・テヘッ」

今の反応で、聞いていた者は全員ずっこけた

それにしても、聖十大魔導に選ばれるとは・・・

それに伴い、現役の聖十大魔道の誰かと入れ替えになるらしい。

報告は評議会がして、少ししたら世間に発表する。正式に発表されるまで、口外するなと口止めされた。

入れ替えによる戦闘はしないらしいが、問題は寧ろ名声や待遇の後に来る義務だ。中でも、評議会の特別指令が有った場合は聞かなくてはいけなくなる...というめんどくさい内容が盛り込まれていた。

「はあ、なんでこんな事になるんだか・・・」

溜め息吐きながら、この称号を受けることにした
そうして、帰ろうとしてエルザは大丈夫かと思い、そこら辺の使者
の人に聞いてみたらもう帰って行ったそうだった。しょうがないの
で一人寂しく歩いて帰った

マグノリア ギルド前

数分間一人で歩いて帰ってきたら、突然眠気が襲ってきた。だが、
僕は夢のメモリーを持っているから、それは効かなかった
そしてギルドに入ると、ミストガンが居た

「おお、ミストガンだ。はじめましてえ」

「っ！？お前は・・・何故俺の魔法で寝ていないのだ？」

「僕はあるメモリーを持つているから効かないよ それと、僕はサ
クヤ・ランライよろしく」

「そうだったのか・・・あ、お嬢様お帰りなさいませ」なに？」

「んー、ただいまあゝアキ、マスター」

「おお・・・帰ってきたか・・・咲夜」

「今、帰ってきたのっ」

「おい・・・アキ。お前はこいつの執事なのか？」

「ええ、そうですよミストガン」

「うええっ！？アキってば、ミストガンと知り合い！？」

「ええ、お嬢様が一週間寝ている間にちよつとした旅へ出て行き途
中で会いまして、友達になる事ができました」

「いいなあゝ、ずるいぞアキッ！」

何故か、アキとミストガンが友達なのを知ってずるいと言う咲夜

「あの・・・すまないが、行かせてもらえないか？」

「ん、僕と友達になってくれるならいいよ。平行世界のジェラールさん」
エドラス

「なにっ！？何故お前がそれを知っている！？」

「それは秘密事項だよ。これは僕の本業だからさ・・・」

「まあいい・・・行ってくる・・・」

「これ・・・眠りの魔法を・・・解かんか」

「伍、四、参、弐、壱」

カウントダウンが終わると同時にミストガンは外へ出て行き、皆が置き始めた

「こ……この感じは」

「ミストガン」

「あんにやろっ！」

「相変わらず強力な眠りの魔法だ」

「ミストガン？」

「フェアリーテイル最強候補だよ」

「顔を見られたくないのか、依頼の時に眠りの魔法で眠らせて仕事を受けるんだ」

「だからマスター以外ミストガンの姿を見た事ないんだ」

「いや俺は見た事あるぜ！」

2階から、ラクサスが出てきた。

「もう一人の最強候補だ」

「咲夜！お前も見てたよな」

何でこっちに振るんだよ・・・めんどくせえ

「そうだね、初めて見たけど。僕的には面白かったよ」

「咲夜も最近で、最強候補になった」

グレイが説明役になってる・・・

「そういえば、お嬢様は何故評議院に呼ばれたのですか？」

「あー、それはね。僕を聖十大魔導士に選ばれたからでした！」

「「「「ええーーーーー！！？」」「」「」」

僕が皆へそう報告したら驚きの声が四方八方から聞こえたと突然、

「ラクサス！俺と勝負しろ」

ナツが目を覚まし、勝負を挑んだ。

「さっきエルザに負けただろ」

「大体エルザや咲夜に、勝てねようじゃ俺には勝てねよ」

「どうゆう意味だ」

エルザ怒りすぎだよ。事实は受け入れようよ。

ミストガンに、眠らされていた時点で負けだろ。

「俺が、フェアリーテイル最強ってことだ」

「降りて来て勝負しろ」

「お前が上がって来い」

「上等だ！」

そういつて二階へ行くとするナツ

二階は駄目なのに、しゃーない止めるか

「（ぼそっ）・・・ひたます 跪け・・・」

咲夜は異常の人心支配の言葉の重みでナツを床にへばりつけた

アブノーマル

「俺と戦いたかったらここまで上がってくるか、咲夜を倒すことだな」

「えっ！どうゆう事」

「前にも言っただけど、ナツは新人の僕に負けているんだよ？」

「あつ、そっか！」

とやりとりしていたら、結局マスターに止められた

夜、ギルド内

僕はアキとミラとカウンターのところでトランプをしていたら、ルーシイが来た

「ねえ咲夜、さっきマスターが言ってた、二階には上がっちゃいけないって、どういう意味なの？」

「ん？そうだね・・・」

「まだ、ルーシイには早い話だけだね」

「ミラさん！」

「ミラ、説明お願いね」

咲夜が説明しようとしたら、ミラが来たから丸投げした。

「二階のリクエストボードには、一階と比べ物にならない位難しい

仕事が張つてあるの。S級のクエストよ」

「S級!？」

「一瞬の判断ミスが死を招く様な仕事よ。その分、報酬もいいけどね」

「へ」

「S級の仕事は、マスターに認められた魔導士しか受けられないの。資格があるのは、エルザ、ミストガン、ラクサスを含めて、まだ5人しかないのよ」

「咲夜なら結構早く上に行けるかもね」

「どーという意味？」

わかる気もするが、まあ聞いておこう

「さっきラクサスが言った事が本当ならミストガンの眠りの魔法が効かなかったってことでしょ？十分上にいく資格はあると思うけど」

どーだろ？

「って聞いている？」

俺はいつの間にやらルーシイの愛玩精霊ブルーを触っていた

「聞いている聞いている」

「聞いている態度には見えないんだけど・・・」

呆れられた

「ちゃんと聞いているよお」

ちなみに僕は基本マスターとミラさんにもタメ口だ

マスターはまあともかくとして
なぜかミラさんってタメ口が聞き辛そうな雰囲気だけど、そんなのは気にしない

「ほんと、そんな雰囲気もってそう」

ルーシーに雰囲気について賛同された

「えー？そんな雰囲気なんて持ってないよー」

ミラさんキャラ変わった？

なんかガールズトークみたいになりそうだったので先に退散
一応女子だが、そういうのは苦手なので、とりあえず家に帰って寝よう・・・

ナツVSエルザそんでもって聖十大魔導！？（後書き）

作者「さあ、咲夜くん！君は聖十大魔導になったよ！」

咲夜「おおっ！？すげえな、作者、今日はあんたの事尊敬してあげるよ！」

作者「やったー、咲夜に尊敬されたやーい！イーヤッフウー！」

咲夜「作者が壊れたっ！？」

作者は今だピーヒャラなどと妙なことをしている

咲夜「作者が壊れたのでこれにて終わりです！下に魔法紹介しておきます！では、また次回に！」

新しい魔法（技、能力など）

クローン：誰かの細胞を少し抜き取り咲夜の作ったカプセルに入れると、短時間でうまれるようになる

人心支配・言葉の重み：めだかボックスの十三組の十三人の検体名・クリエイト みやこのじょうおとこ サーティン パーティー

創造の都城 王土の使う異常。真骨頂のその1である。電磁波による干渉で相手の身体を意のままに操る（「平伏せ」、「跪け」等の一語の動詞を多用する）

夢のメモリー：Dグレのノアロードのメモリー。夢の世界へ連れて行ったりなど、いろいろできる。この話ではミストガンの眠り魔法などは効かないようになってる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4710z/>

異世界情報屋になったぜ！

2011年12月21日22時52分発行